二、三掲げるとまず最初に伊豆修善寺町に在る曹洞宗の名刹肖盧山（走湯山）修禅寺（一名、柱谷山寺）がある。この寺は弘法大師空海の門弟である果隣が延暦十七年に創建したと伝えられ当初は真言宗であった。その後建長年間に大覚禅師蘭溪道隆により臨済宗に転宗し、さらに戦国時代に曹洞宗と転宗し現在に宗派としては到っている。当寺には直接、間接として鎌倉時代の当時の有名人が数人配流され生活している。それらの人々は源範頼、源頼家、蘭溪道隆、一山一寧の四人である。この土地は古来配流の地として有名であり前記の人々も北条氏の策略によったり、スパイと嫌疑されたりしてこの地で幽居し、ある者は死亡し、ある者は鎌倉に帰ったりしている。修禅寺には北条政子が頼家冥福の為に奉納した刺繍釈迦三尊図（宋代）など鎌倉時代の遺物が数多く現存している。又この地は古来延喜式にもその名を届める如く歴史の町であり夜叉王で有名な小説修禅物語の町でもある。

願成就院、文治五年源頼朝が奥州征伐の大願成就達成の為に北条時政に建立させた寺でその伽藍配置は奥州平泉に在る毛越寺を真似て建立したと言われるが度度の火災により、その中でも代表的な火災はまづ延徳三年足利茶々丸が伊勢長氏に攻められた時、当寺に隠れた為に焼かれた時、室町末期に清織房、清戒房らの念仏行者が当寺に住んだ為に高野山の怒りに触れて攻められた時などが、主な火災で現在は大御堂と称する一堂が立っているだけで昔の面影は少しもない。当寺には運慶作のすばらしい仏像彫刻がある。これは運慶の初期の作品で目に特調のある仏像で鎌倉武士の信仰の対象に作られたもので優しさの中にある種の恐しさのある仏像である。宗派は古義真言宗。

妙法華寺、日蓮宗本山で経王山と称する。日蓮六老僧の一人日昭が鎌倉浜土に法華寺を開山したのに初まり、十六世日亮の時に現在の三島市玉沢に移転した。江戸時代には徳川氏の庇護を受け内外共に発展し栄えた。日蓮の自筆本尊、絵曼陀など国宝級の什物を数多く蔵しているが、驚いたことには準国宝なる什物が数多くあった。

今年度の研究旅行（春期）は全般にみて、これまでの研究旅行より内容的に充実した旅行であったと思う。旅館でのデスカッション、レポート提出と、先生も学生もその気になって研究旅行に臨んだから、それに、人数的にも恵まれていた。史学会の今後の一層の充実を期待し、ここにペンを置かせてもらう。

終り

◇春季一年研修旅行記◇

一年委員記

六月十二日、歴史科一年生にとって初めての試みである研修旅行は三人の先生方と三人の先輩方、それに私達四十余名とで行われた。まず最初の目的地は、天授元年、岩槻城主、太田道灌の父、道真が創立し、松平輝綱が岩槻からこの埼玉県の野火止に移したといわれる平林寺。この寺に一歩踏み入れた途端、武蔵野の面影が素直に私達の心に入って来た。総門から山門までの道の両側には、前日の雨でしっとりとした檜が続いており、その山門に運慶の作である力強い流動的な仁王像が私達をにらみつける様に立っていた。仏殿、本殿と禅寺の特色を示す七堂伽藍を通り抜けると、うっそうと

茂ったくぬぎ林がこれも又、前日の雨に洗われ、すがすがしく一層、武蔵野の感を深くした。本堂裏手には松平家代々の墓があり、あの島原の乱で功のあった松平信綱が作らせた野火止用水が三百余年を経た今日も流れ続けている。落ち着いた静かな気持ちで一日中歩きまわりたい感じを起こさせた寺を後にして、次の目的地である正福寺に向って出発した。

東村山にある正福寺は、鎌倉期の禅宗建築の代表である唐様で、円覚寺舎利殿と同様である。北条氏の姓と三鱗を用いてあることから、この寺は北条時宗の命名になることが想像される。又、千体地蔵、そりのない華燈窓等が印象的で、その偉大さ、荘厳さ、静寂さというものにしみじみと打たれ、本堂での昼食でさえ、味気無く思われた。

さて、次の武蔵国分寺は残念ながら、北院、講堂、金堂、七重塔等の礎石のみで、その跡には、一面、緑のあざやかな草が、何事もなかったように礎石をおおっており、短時間ではあったが私達にある種の感慨を起こさせ、歴史は足で、目で学ぶものだと思いながら次の深大寺に向った。

おソバのおいしいことで有名な深大寺は、松や杉の林に囲まれ、清らかな水が竹やぶの中から流れ、その静かなたたずまいは、これが東京の一隅かと思われた。桃山時代の建築といわれる山門をくぐり抜けると、線香の煙がただよう本堂に入った。関東では珍らしい白鳳仏が神秘な笑みをたたえて、何んとなく心の安まる感じがした。縄文式土器の発見から、ここにも我々の祖先がいたことが、うかがえるが、この豊かな水に恵まれた土地を安住の地としたこともうなずける気がした。

短時間でこれだけの行程は一寸無理で、不満だったが、自分の知識が少しは豊かになり、遠く奈良、京都を訪れなくとも身近に、こんなに、いにしえの見るべき寺院があるのはうれしかった。

それぞれの寺院が個性的でもう一度ゆっくり時間をかけて見学したいという気持ちを私達に起こさせてくれたことは、今回の収獲であり、進歩であると思った。

〃親睦旅行〃

信濃を行く

二年　小熊章夫

満員で新宿を出た夜行列車が通勤列車となる頃松本に着く。この旅の第一の目的は親睦でありそれをかなえてくれる最初の処が松本城である。別名深志城。曇りそうなそれでいて蒸し暑くなりそうな初夏の陽光の中に姿を堀の水に映してどっしりと聳えている。御殿跡等は今は西洋式の芝生庭園と化しているが、五層大階の天守を中心に渡櫓で繋れた乾の小天守、それに辰巳附櫓、月見櫓等が残っており、中濠・外濠に囲れ、余り高くない石垣に調和して安定感のある平城の姿を示してくれる。四〇〇年以上の歴史を持つ城を自由に見学し、散策し、本丸に登り、石垣に寄り添い、昔を夢みてからバスで美ガ原に向う。

標高二千三十余米の高原、美ガ原。オレンジ色のレンゲツツジの群落、新緑の若葉、濃緑の唐松、静かに水を湛える美鈴湖、刻々と変化し、一刻もじっとしていない霧と陽光と風景、肌に心地よい